

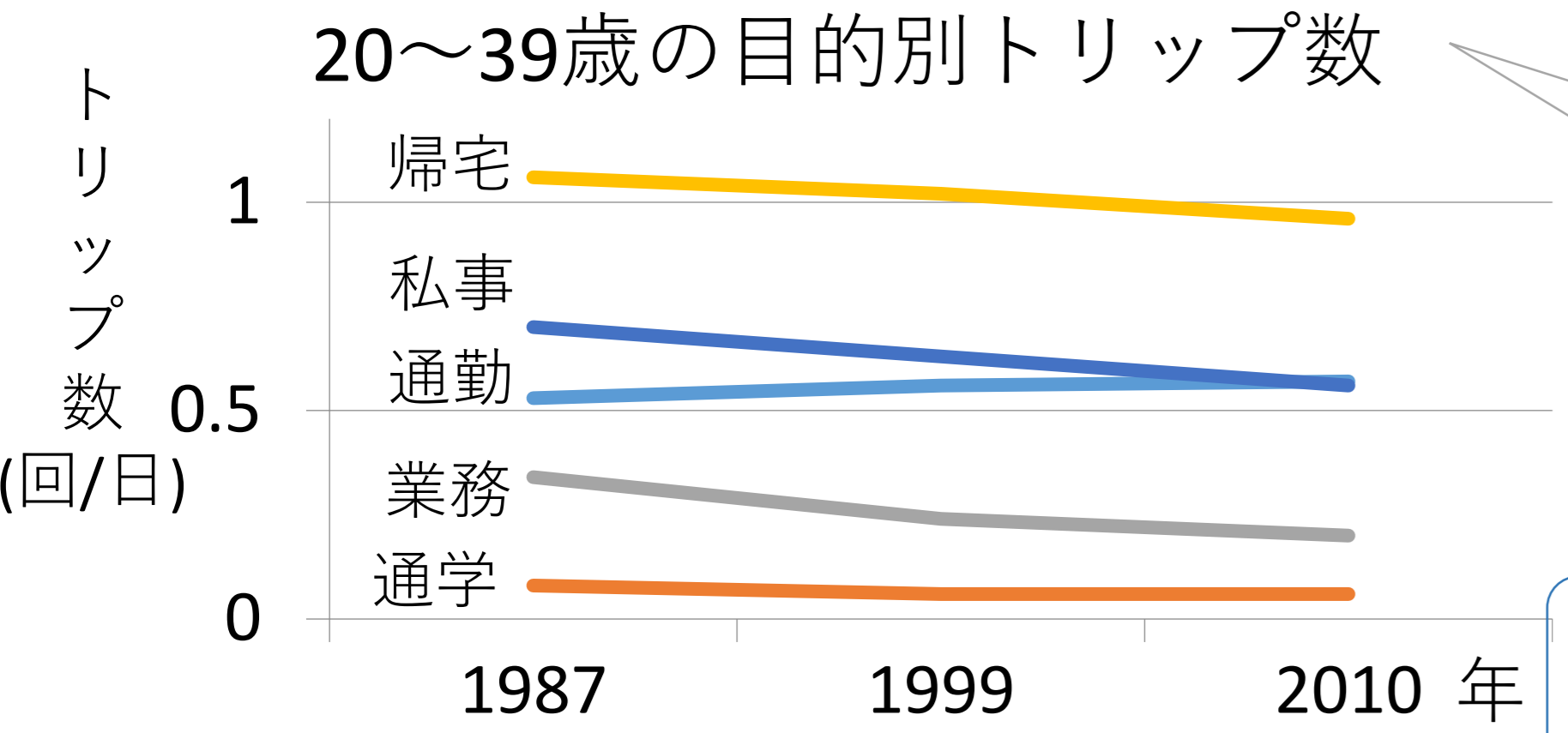
新たなモビリティマネジメント: 「外出MM」と「活動MM」の可能性 —活動格差社会の要因分析から—

○平間尚夏(筑波大学大学院)
森英高(筑波大学大学院)
谷口守(筑波大学)

I.はじめに 2016.9: 「生成原単位減少の背景と社会的な意味を探るシンポジウム」

・外出活動を行わない者の急増が社会問題化

(代表:土井勉)



20~39歳の目的別トリップ数
・ワークライフバランス、家族形態の変化
特に...若者、低所得者の外出活動が減少

活動格差社会

個人の厚生 + 地域活力の維持 ⇒ 外出促進が必要

日常生活全体の低活動化の可能性 ⇒ 活動促進へ社会的な配慮が必要

既存研究では、
外出・屋内両面の活動、精神的属性に
着目した研究は見られない

目的

日常生活全体の活動促進に寄与する情報の提示

内容

- ①生産年齢層の活動の実態
- ②活動の状況に影響を及ぼす要因を
外出・自宅内の二側面から分析

II.アンケート概要

調査方法	楽天リサーチによるwebアンケート
調査対象	全国の学生以外の生産年齢層
調査期間	2017年1月31日~2月7日
サンプル数	スクリーニング調査: 9396サンプル 本調査: 1068サンプル
質問項目	・外出回数、目的 ・自宅内活動時間、内容 ・活動意欲、生活満足度 ・身体・精神機能、価値観 ・家庭環境、居住環境 ・施策導入時の活動量の変化予想

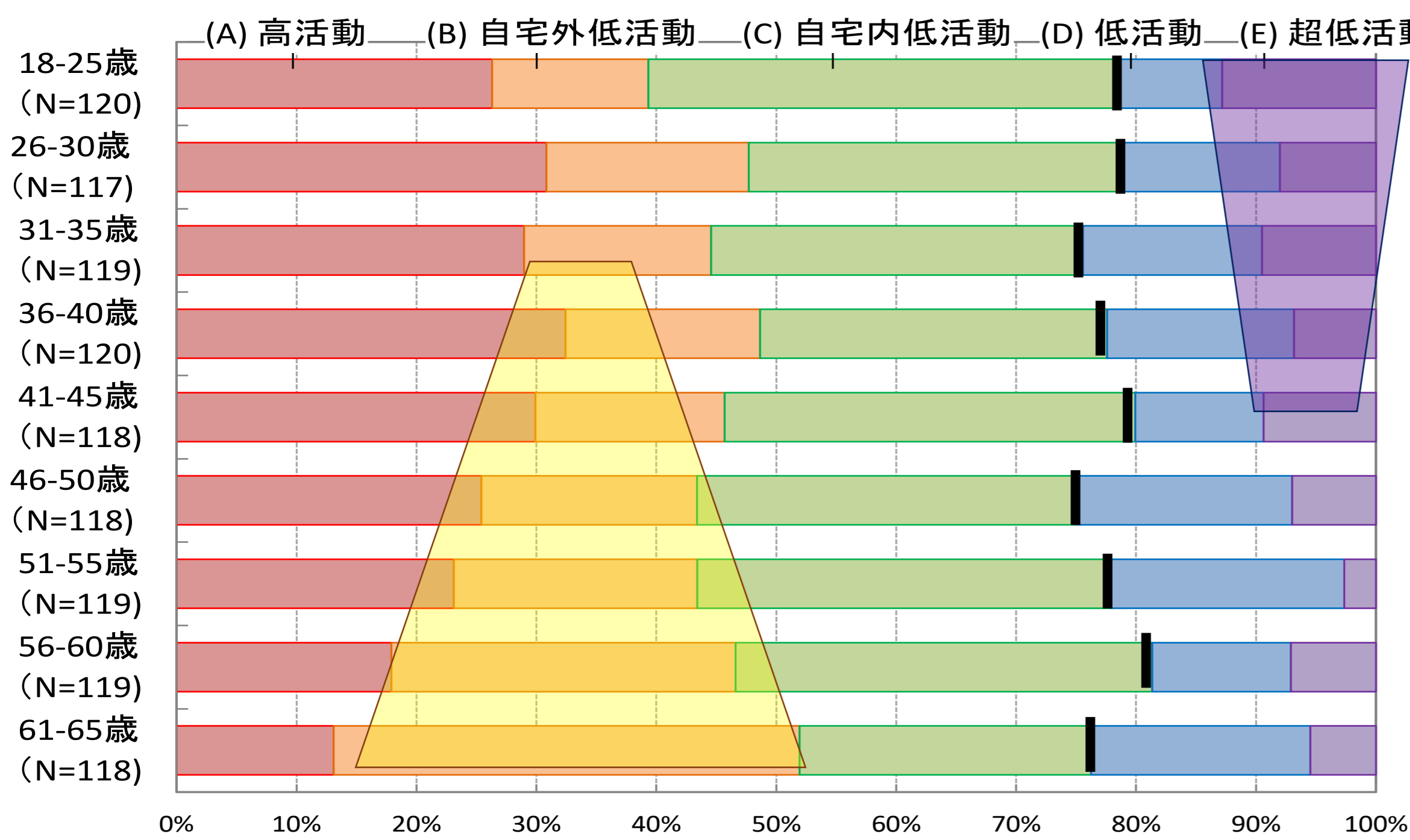
外出、自宅内双方の活動
価値観や精神的属性の
情報を包括的に取得

III.活動タイプ分類

外出活動 自宅内活動	平日1日1回以上 外出かつ 休日2日に1回以上 外出	平日1日1回未満または休日2日に1回未満の外出	
		平日1日0.5回以上外出かつ 休日に外出することがある	平日1日0.5回未満外出 または休日に全く外出しない
3時間以上	高活動(A)	自宅外低活動(B)	
3時間未満	自宅内低活動(C)	低活動(D)	超低活動(E)

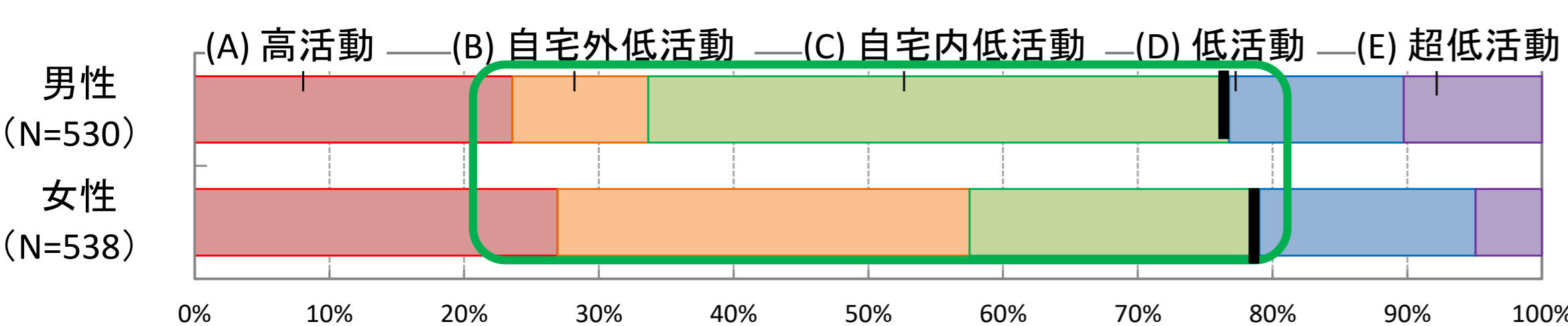
IV.分析結果・考察

①年齢・性別と活動タイプ



⇒身体機能低下や退職の影響

⇒若年層のパラサイト化、働き方の多様化



⇒就労率、家事・家庭内役割の違いの影響

②活動タイプと属性の判別分析

アイテム	第1軸	第1レンジ	第2軸	第2レンジ	サンプル
生きがい	上段: あり 下段: なし	0.253	-0.055 0.454	0.509	953 115
役割		0.053	0.092 -0.185	0.276	714 354
5年前と比べた 活動変化原因	家庭環境	-0.013	-0.071 0.145	-0.009 0.185	121 168
	仕事環境	0.057	0.024 -0.067	0.010 -0.265	142 149
	人間関係	-0.067	0.084 -0.095	-0.447 0.377	15 43
	趣味環境	0.276	-0.276 0.146	-0.141 -0.146	79 40
平日ネット利用時間	利用しない	0.82	0.391 0.133	-0.060 0.189	187 259
	1時間以内	0.142	0.169 -0.010	-0.014 -0.172	438 184
	1~3時間	0.169	-0.010	-0.172	184
雇用形態 労働時間	正社員	0.581	0.281 0.519	0.285 0.086	79 177
	非正規	0.281	0.325 0.249	0.004 -0.112	262 129
	8時間未満	0.612	0.612 -0.30	-0.406 0.510	62 50
	8時間以上	-0.30	-0.10	-0.186 0.186	39 40
各軸の重心	高活動	0.511	-0.137		
	自宅外低活動	-0.867	-0.525		
相関比		0.676	0.442		

⇒個人の価値観や
自己有能感が活動量に
影響

・変化そのものが
活動量を増加
⇒外出活動を促進
自宅内活動も活発化

⇒サイバー空間で
活動的な者は実空間も
活動的という
既存の知見と一致

⇒通勤がないこと、
自宅内での義務的活動
が多いことが要因

③施策実施時の活動量の変化予想

施策	活動タイプ	活動タイプ				
		高活動 (A) N=426	自宅外低活動 (B) N=228	自宅内低活動 (C) N=267	低活動 (D) N=95	超低活動 (E) N=52
外出活動	交通	○**	○	○	△**	△*
	施設整備	○**	△*	○	△**	△*
	交通	○	○	○	△**	○*
	施設整備	○*	△**	○**	△**	○
	交通	○	○	○	△**	○
自宅内活動	交通	○	○	○	△**	○
	施設整備	○*	○	○**	△**	○
	交通	○	○	○	△**	○
	施設整備	○*	○	○**	△**	○
	交通	○	○	○	△**	○

○: 増加する者が多い △: 増加しない者が多い
独立性・残差の結果 * : 5%有意 ** : 1%有意

④人助け時の相手の反応による次の人助けへの意欲

反応	高活動 (A) N=426	自宅外低活動 (B) N=228	自宅内低活動 (C) N=267	低活動 (D) N=95	超低活動 (E) N=52
感謝の言葉	90.61%	92.10%**	87.64%	86.32%	73.07%**
御礼の食べ物	73.24%	72.81%	72.28%	72.63%	57.69%**
御礼の金銭	75.11%**	72.81%	72.28%	71.58%	65.38%**
反応なし	40.85%	44.30%	40.45%*	47.37%	55.76%**

独立性・残差の結果 * : 5%有意 ** : 1%有意

・低活動者の活動喚起のために
ハード面の環境整備だけでは
不十分

⇒人とのつながりや
役に立つ体験が
低活動者の活動も
促進させる可能性

V.おわりに

- 外出、自宅内活動ともに個人の属性によりその量に差が発生
⇒外出方法以前に、**外出や活動**をすること**自体の喚起**が求められる
- 外部環境を整備しても**低活動・超低活動者の活動は増加しにくい**
⇒人とのつながり、生きがい等により日常生活に変化を生み出すことが必要

今後の展望

- 活動量だけでなく活動の質に目を向けた
施策の検討
- 個人属性毎の効果的な施策の検討